

〈自然観察の手引き〉

有明海・八代海 沿岸の鳥

近年、貴重な野鳥の生息地として、また漁業にも影響を与える環境変化から取り上げられることが多い有明海とその沿岸。そこに生息する野鳥と環境、おもな課題を概観します。写真と解説をとおして、身近に感じていただけるように構成しています。さらにお知りになりたい方は、お近くの野鳥の会会員にお尋ねいただくか、探鳥会などの機会をご利用ください。



荒尾海岸



横島干拓・菊池川河口



白川河口・熊本港



球磨川河口（鼠蔵地区）



地図は WWF-JapanHP より引用

●有明海・八代海の干潟

有明海と八代海（不知火海）のような外海から隔離された浅い内湾はごく特殊な海域で、生物の種類や量がとても豊かです。一方で半閉鎖的な地形から、河川や住宅、工場、農業・水産業・畜産業などに由来する栄養が過剰になりやすく（文末注釈参照）、また埋立ても盛んであったことから、利用と生物との共存が課題となってきた環境でもあります。（注：冬季では水面に湧出している栄養が過少となることもある）

球磨川河口（八代海）

シギ・チドリ類ネットワーク参加湿地。

オオズグロカモメ、ホイグリンカモメなど、日本では少ない種が越冬する。



▲泥質干潟に多いヤマトオサガニ。他にハクセンシオマネキ、チゴガニが多い。

カニ類は干潟の底生動物（動物ベントス）の主要な構成種で、ゴカイ類、魚類、貝類とともにシギ・チドリ類、カモメ類などの水鳥の主要な餌となっている。



球磨川河口の干潟
手前はオオソリハシシギ、奥はハマシギの群れ



ホイグリンカモメ、ホイグリン系カモメが多く渡来する特殊な構成のカモメ群



▲荒尾海岸。菊池川が運ぶ砂や砕けた貝殻が混じる明るい砂浜がみられる。盛んなアサリ・タコ漁場などと水鳥の生息地が一体となっているが、近年底質の悪化が顕著。



◀オオソリハシシギ。主な越冬地はオーストラリア。現地でも“ゴッドウィット”と呼ばれ、親しみのある鳥となっている。

▶満潮時の汀線で待機するオオソリハシシギ、ダイゼンの群れ。手前は夏羽のユリカモメ。



●春～初夏の水田とヨシ原 ～湿地環境として利用する鳥類

日本神話の昔、豊葦原・秋津島、つまり豊かなヨシ原・トンボの国と呼ばれた日本も、今では隅々まで耕され、人が住んでいます。それでも水田は、本来の立地に良く対応した利用であり、“半自然の湿地”が形成され、多くの生き物との共存を可能にしてきました。水田はまた、地下水涵養、保水防災機能などをも備えています。除草剤を使わない畦にはミミズが多く、春の七草を含む水田雑草が豊富です。近年の過度の効率化により、こうした機能が損なわれることが懸念されます。

水田の周りにあるヨシ原も、鳥が棲めるだけではなく、自然の浄水場としての機能を持っています。ヨシ原の重要性が見直され、ヨシ原保全条例を定めた地方自治体もあります。2008年ラムサール条約締結国会議では、水田の多面的な機能を見直そうという「水田決議」が採択されました。



▲水田と農業用水路で繁殖するカルガモ（上）。
渡り時期に水田を半自然の湿地として利用する
コアオアシシギ（下）。



▲ハス田に飛来したスズメくらいの大きさのヒバリシギ。ハス田は田植え前にも水が張られ、旅鳥の貴重なオアシスとなる。また、絶滅危惧種のタマシギ、ヒクイナの繁殖地となり、横島干拓では近年ケリの繁殖が確認された。



タマシギみ

▲休耕地や冬季の湿田はタマシギなどの生息場所となる。この雛は、バン、ヒクイナなどと同様、孵化後すぐに親の後をついて歩くため、水田のコンクリートの水路がトラップとなりやすい。



◀かつては普通であったオオヨシキリも、隣接する福岡県ではレッドデータブックに掲載されている。熊本でもヨシ原の減少のためか、近年熊本市小山町、菊池市（旧旭志村）などで、トウモロコシ畑で囀るものが多くみられる。この現象は2000年ころから。

●冬の水田・ヨシ原と干拓地 (原野的環境) ~横島干拓(玉名市)の重要性

冬の水田、特に沿海地の干拓地は、本来湿地やヨシ原などの原野が広がり、太古からこれらの環境を利用する水鳥や猛禽、ヨシ原の小型種が多く生息していました。今日では、冬の水田と周辺のヨシ原、遊水池・調整池がその代替環境となっています。



マナヅル(撮影 満田寛)



ハイイロチュウヒ

▲横島干拓とコハクチョウ。他にマナヅルなどの大型水禽、チュウヒ、ハヤブサなどの猛禽類などが利用する。草地、二番穂の実る広い刈田、またヨシ原が混在する環境が重要。

▲岸にヨシが連続する潮遊池は重要な休息地。改修と区画整備でヨシ原は急激に減少する。

<2000年に飛来したコハクチョウの一日>

▶日中は刈田と畦で採餌と休息を繰り返す。二番穂をしごいて食べていた。休息は畦。

▲休息場の畦から飛び立った跡を見てみた。糞には植物質が多く混じる。幼鳥のほうは泥が多く混入し採餌が慣れていないことをうかがわせた。大型水禽は越冬地、餌の採り方を親鳥から受け継ぐ。

▲コハクチョウの大きな足跡。日本産鳥類最大級の巨体を維持できる環境を保つのは、無計画ではできない。定期的な渡来があるマナヅルも同様。



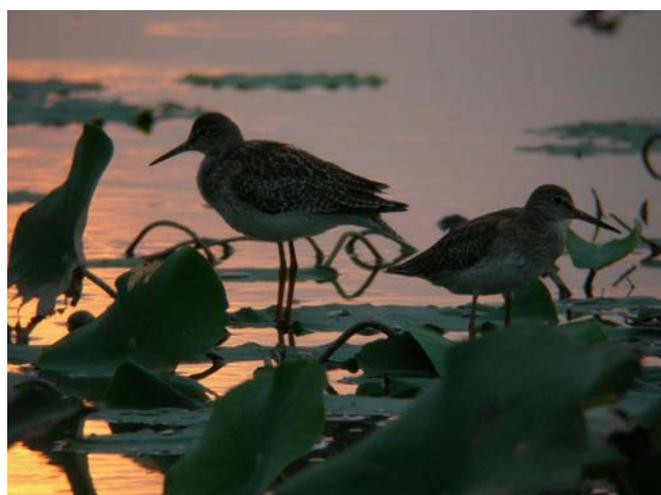
▲横島干拓に渡来するマナヅル、コハクチョウは、毎日約10kmを白川河口周辺のねぐらへ帰る。

●水鳥はどこで休むのか

水鳥や猛禽など大型の鳥類の生息には、良質の餌場のほか、安心できる休息場所（ねぐら）が必要です。彼らはどこでどのように休息しているのでしょうか。必要な環境とは？



▲汀線や砂州、護岸で休息するシギ・チドリ類、カモメ類。



▲採餌場所のハス田で休息するアカアシシギ。

◀八代海砂川河口の導流堤上で休息する水鳥群。カワウ、マガモ、クロツラヘラサギ、シギ類が見える。



▲海岸まで人間活動が及ぶ場合、汀線が唯一の休息場所となる。砂浜の中央部におびたしいシギ・チドリ類の群れが休息する荒尾海岸。散歩の際は堤防内側の迂回をお願いいたします（p.9 参照）。

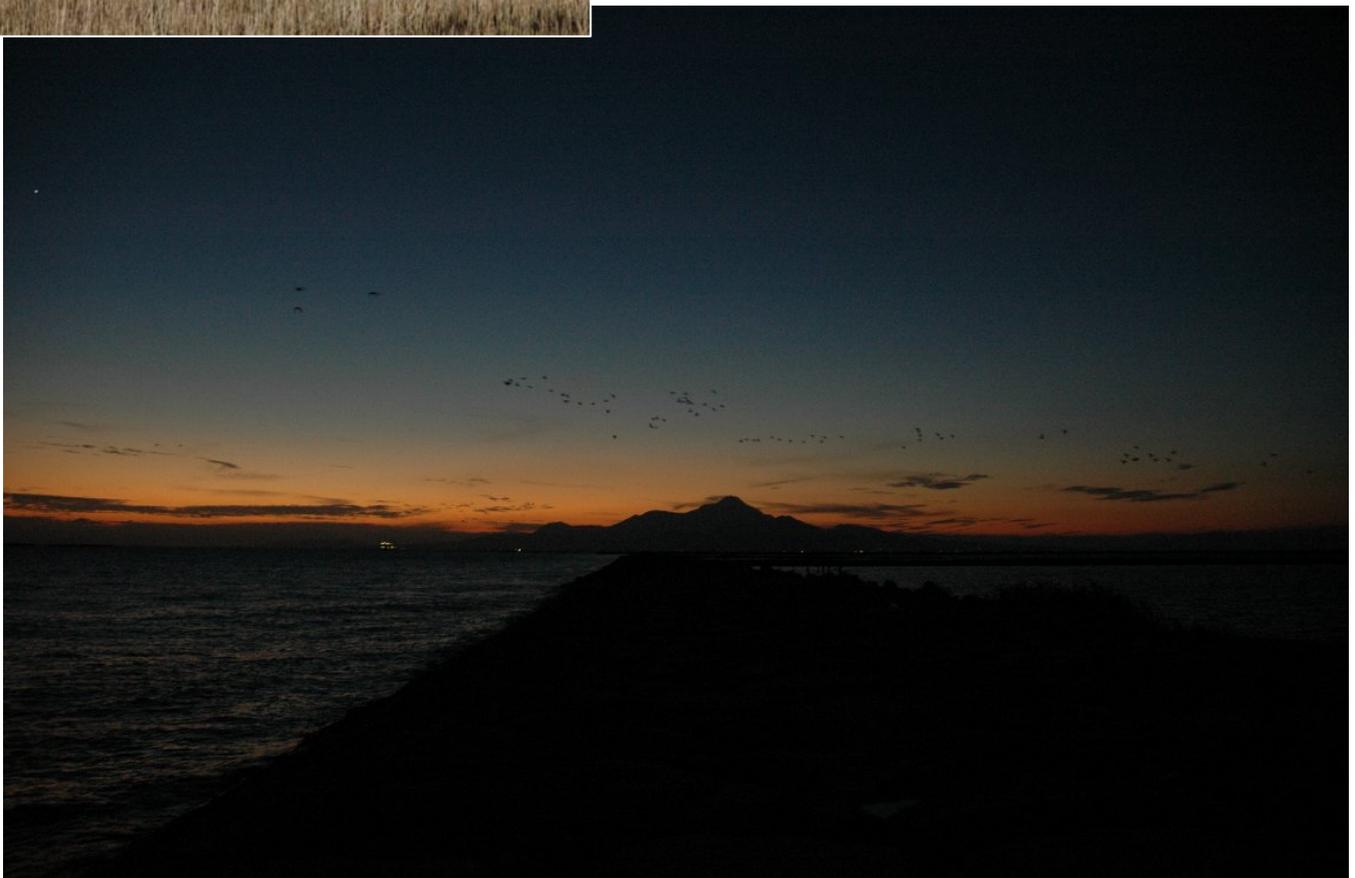


◀横島干拓のヨシに覆われた遊水池は、カモ類の休息地となるほか、コハクチョウの渡来時には、羽繕い、ねぐら入り前の休息・羽繕いに利用された。

▼公園で見るカモは休んでいる状態
写真はオナガガモとヒドリガモ。
(坪井川遊水池)



◀マナヅル、コハクチョウなど大型の水鳥は、二番穂が出る横島干拓に渡来し、白川周辺の広いヨシ原に囲まれた湿地でねぐらをとる。
▼夕暮れに飛び立つカモの群れ。有明海沿岸に渡来するカモ類は、干潟で採餌するものは満潮時に、刈田で採餌するものは昼間に、安心できる水面で休息する。



●有明海の野鳥を取り巻く課題

以下に、1) テグス被害・防鳥ネット・狩猟と保護区、2) 人の利用との隔離、3) 農畜産業からの河川への栄養流入・漁業施行上のインパクト、4) 大型水禽の生息地保全 について取り上げます。

1) テグス被害・防鳥ネット、重要湿地での狩猟



◀ 河口や池沼に放置されたテグスが絡みつき命を落とす水鳥は予想以上に多く、中には希少な種が被害にあうこともあります。くちばしでくまなく浅場を探るクロツラヘラサギでは、九州・沖縄では最近2年でわかっているだけで4件以上の被害がありました。釣り糸は持ち帰る、枝針をつけないか最小限とするなどの配慮をお願いします。

▲ 釣り糸が巻きついたもの（江津湖、高野茂樹撮影）

▶ 農作物への食害対策のための防鳥対策は、ほとんどは配慮された糸状のものが使用されていますが、かすみ網に似たネットも時々見ます。被害にあうのは害虫を食べてくれるシギ類や、猛禽類。ハスの新芽を食う恐れがあるバンは歩いて移動するため効果がありません。夜間のカモの被害は実態が良く把握されていませんが、目合いを大きくし、昼間見やすい色のついた糸にすること、水を浅くすることなどで対応可能と思われま（4～10月はカモはほとんどいません）。



◀ 一本のテグスでもハヤブサのように高速で飛行する種では事故になることがあります。（この個体は救助された。）



▲ 防鳥ネットにかかったタカブシギ

▼ 狩猟はシカの個体数調整などで重要な役割を担っています。ただし、水鳥では重要な渡来地やねぐら周辺での狩猟、希少種の誤射の問題があります。日本野鳥の会熊本県支部では、クロツラヘラサギの八代海でのねぐらとなる氷川河口周辺などが鳥獣保護区または自然環境保全地区などへ指定されることを願っています。



2) 人の利用との隔離 ～荒尾の休息地について

昆虫や両生類と異なり、「野鳥の生息地の保全での特殊な問題」のひとつは、**野鳥が安心できる距離をいかに保つか**ということです。海岸まで人間活動が及び場合、水鳥の休息場所となる汀線付近で、人との適度な距離が保たれず、突堤などの人があまり侵入しない場所がない場合、旅の疲れを癒すまもなく、始終飛び回ることになります。



▲シギ・チドリ類の重要な渡来地のなかでは、特に荒尾海岸で共存のための工夫が必要となっています。海岸が直線的で、突堤もないため、岸のブロック敷きでシギ・チドリ類が休んでいます。最も良く休息に利用する部分に、散歩などで不用意に立入らないなどを啓発していただくよう荒尾市にお願いしています。

3) 農畜産業や漁業施業上の環境負荷

菊池川、緑川など主要河川は、農地、河川敷牧草地の堆肥等が農業利水のための堰に堆積し、堰が開放されるとき河口に汚泥が堆積します。

- ▶9月下旬の菊池川水系転倒堰と解放後の汚泥。
- ▼10月上旬の菊池川河口。本来砂地となる岸でこれだけの汚泥の堆積があり、浅海域への影響は計り知れません。



(黒く見えるのは堆積した汚泥の塊です。右端の河原中州の色が自然の礫河原です)

※他に漁業施業上の残滓による栄養過負荷、酸処理剤の廃棄方法によって生じる環境負荷、工場排水、生活排水による栄養過負荷があります。



4) 大型水禽（水鳥）の生息地の担保、ツルの分散事業

マナヅル、コハクチョウなど大型水禽は計画的な保護が重要となります。九州のツルについては、地域の資産であるとともに、国レベルのプロジェクトとして「ツルの越冬地の分散」が（財）日本野鳥の会の呼びかけによって展開されています。現在の状況でもマナヅルが毎年飛来する横島干拓は、その適地となっており、生物多様性と地域の資源保全の観点から安定化が切望されます。



▲横島干拓に飛来したマナヅルの群れ(2005年2月)。

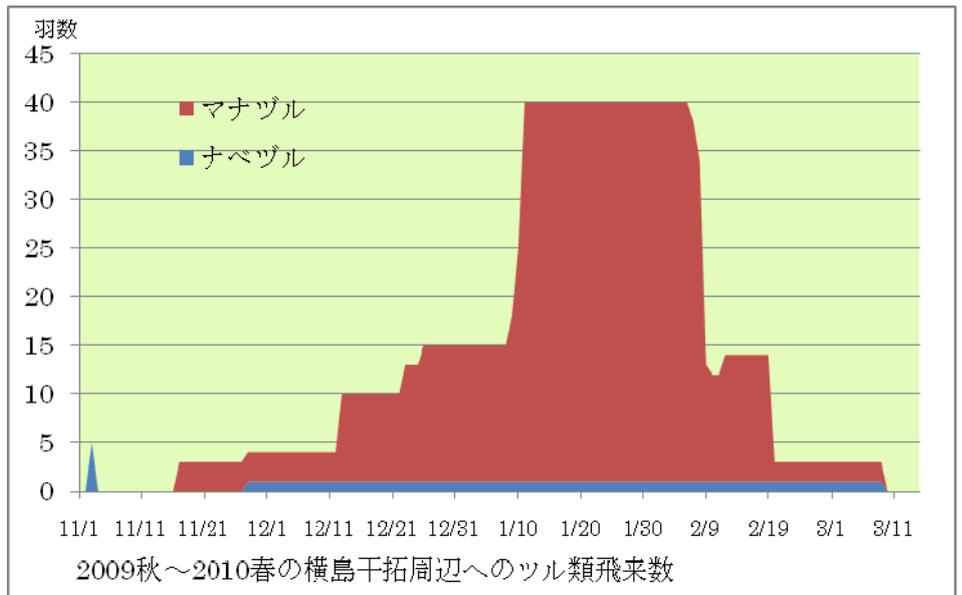


ナベヅル・マナヅル分散プロジェクトのポスター（イラスト 重原美智子）

マナヅル

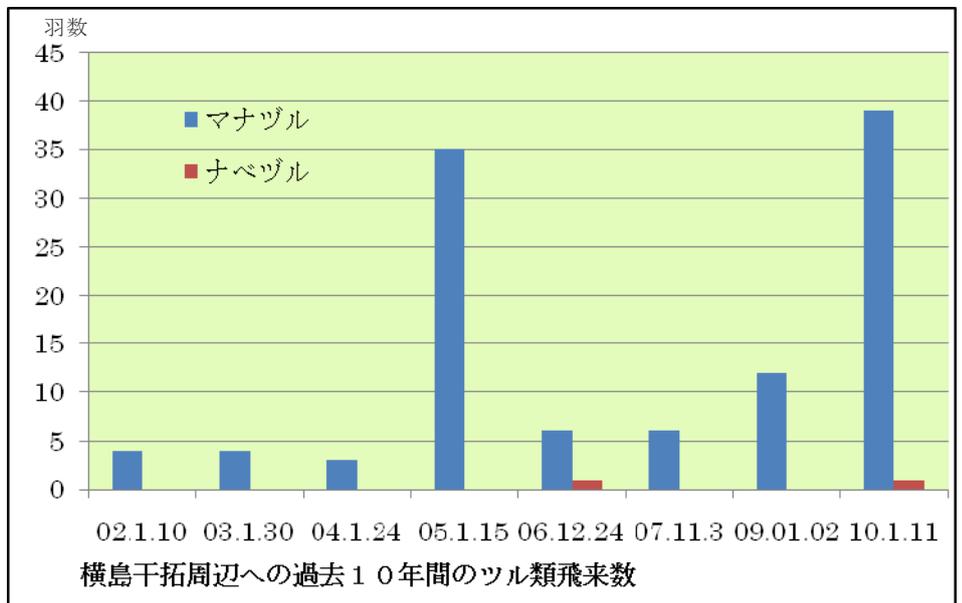
▶玉名平野にある横島干拓周辺では、2009年11月から2010年3月の期間に、マナヅルとナベヅル最大40羽が繁殖地のロシア極東部・中国東北部から越冬のために飛来しました。

（満田寛さんによる調査データを引用）



▶横島干拓周辺へは、この10年間毎年続けてツル類が飛来しています。

（熊本県支部報の野鳥情を安尾征三郎さんが集計）



<メモ>

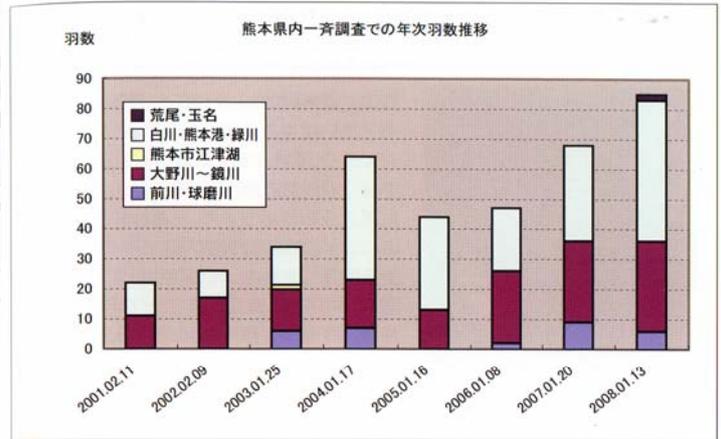
マナヅルは世界に5千～6千羽、ナベヅルは1万羽と推定されている(2009年)。

クロツラヘラサギ 写真図鑑「くまもとの野鳥」の38～39ページに収録されている内容です。

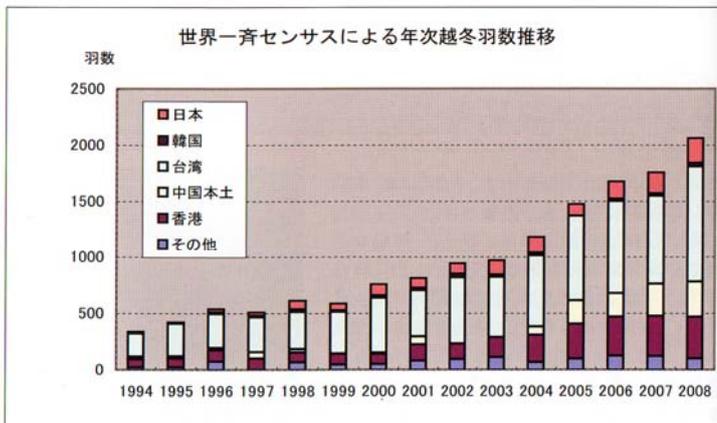
県内におけるクロツラヘラサギ生息状況



本種は世界で東アジアに約2000羽しか生息しない希少種である。主に朝鮮半島西海岸周辺で繁殖し、九州～沖縄、台湾、中国大陸沿岸で越冬する。本県では、主に河口域で越冬し、その総数は国内最大規模であるが、生息は局地的であり、開発等による環境変化の影響が懸念される。



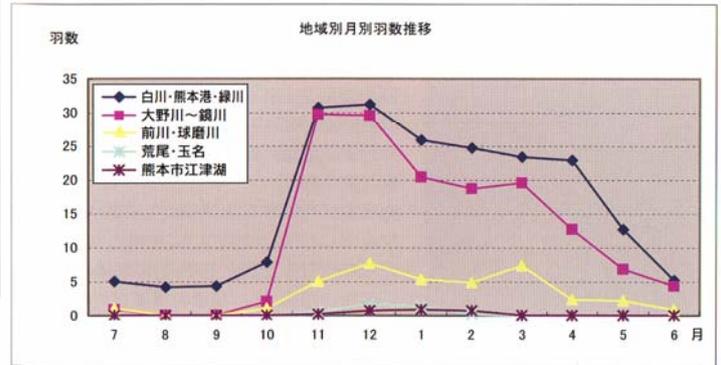
移動が落ち着き、ほぼ定着個体のみとなっている1月、満潮時刻が午前中となる所定の日を選び、各所に観察者複数を配置し、主として休息中の個体を一斉にカウントしている。この5年間で国内羽数の3～4割が熊本県で数えられており、白川・緑川河口域、氷川・鏡川河口域、球磨川・前川河口域の干潟(餌場)及び満潮時休息場所の保全は重要である。



香港観鳥会(Hong Kong Bird-watching Society) 取りまとめ

世界的に増加傾向であるが、調査地及び調査者の増加や生息地環境保全などクロツラヘラサギ生息環境への世界的な関心の高まりによると考えられる。しかし、各国において干潟や河口域など沿岸域の開発が進行しており、不測の事態が懸念されている。

注)「その他」はタイ・ベトナム・マカオ・フィリピン

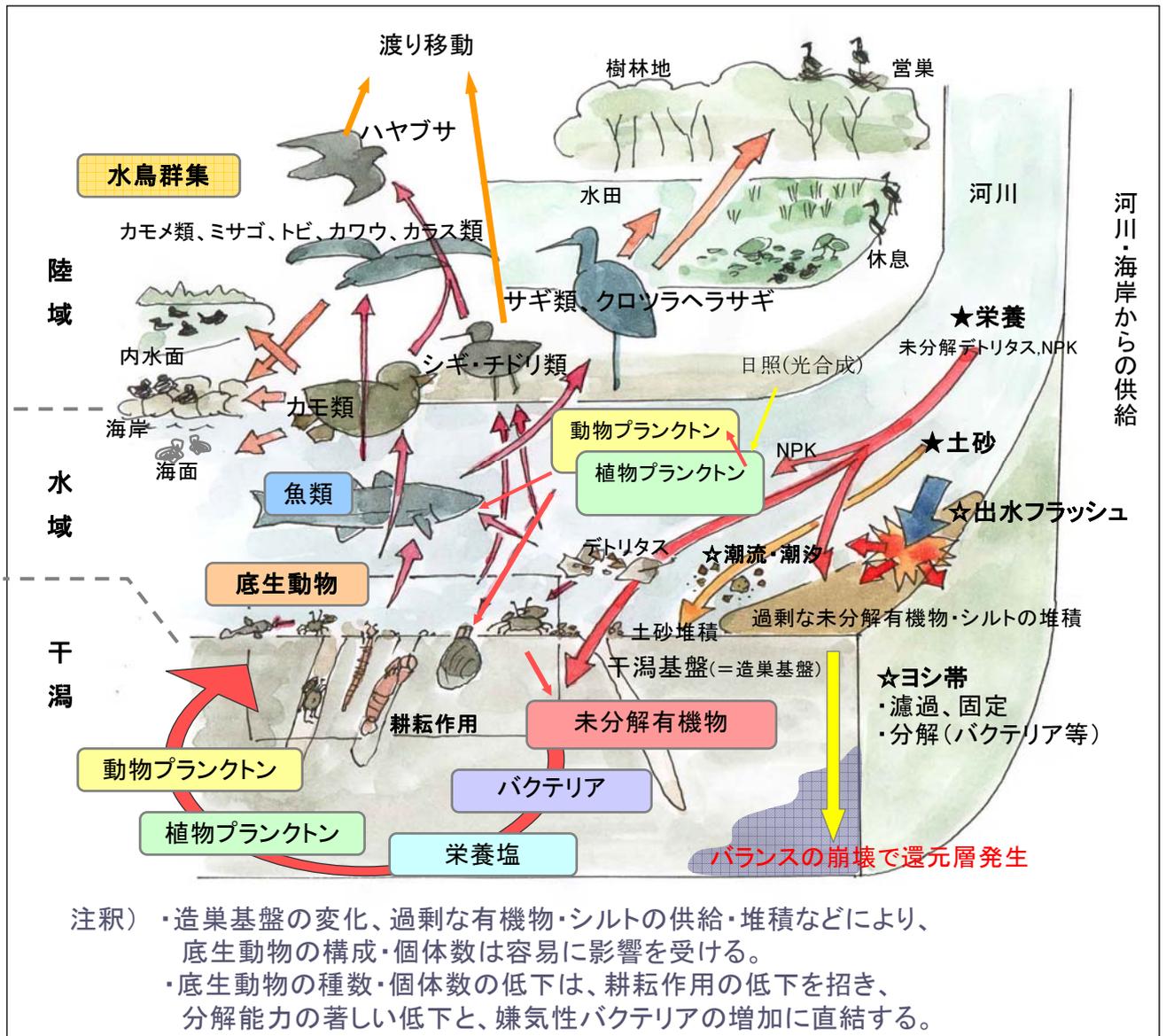


2002～2007年の月別平均羽数推移。例年10月に越冬第一陣が到着し、翌年5月繁殖地に向け飛去するのが通例である。近年は若鳥の越夏が見られることが多くなった。

▼クロツラヘラサギも世界に千羽の国際的な希少種。白川河口で群れて効率よく採餌する様子。大型水禽が安心して暮らせる環境は、熊本県の重要な資産。



〈資料〉有明海の物質連鎖イメージ



〈干潟の健全性を左右する鍵となる条件〉

チェックポイント!

- ①河川や海岸からの栄養供給（流入する栄養の量）
 ～過供給になる要素は人の営みから。排出物は適正に処理されているか？
- ②栄養流入のパターン
 ～出水時に供給される量は、適度で干潟の分解能力に応じたものとなっているか？
 ～それとも、一度に多量の汚泥などの栄養がシルト（粒子の細かい粘土）とともに流れ出ていないか？
 ～河川横断構造物（堰など）の形状や放流方法は、栄養の流れに過度のひずみを生じさせていないか？

〈水鳥生息地の保全に不可欠な計画性〉

- ①人の活動域との適度な隔離、休息地の保障はなされているか？
- ②農業政策と生物多様性保全のバランスがとれ、共存がなされているか？
- ③地域の人たちへの周知がなされ、資源として認知されているか？

おわりに

こうした身近な自然の仕組みを知る第一歩として、鳥の名前を知り、その生態を知ることはとても有効な方法です。野鳥図鑑を片手に、身近な野山や海岸に出かけてみるのはいかがでしょうか。日本野鳥の会熊本県支部では、毎月熊本市立田山などで観察会を開催しています。わからないことは探鳥会のリーダーにお尋ねになることもできます。

また、県内でも自然環境の問題は広範囲にわたりますが、ほとんどの問題は広く認知されていませんし、生態系や自然、野生生物の保護管理に係わるボランティアは慢性的に不足しています。さらに高い意志をお持ちの方は是非お力をお貸しください。私たちの足元の自然に関心を持ち、大切にすること、何かの活動に加わることに、これは思いがけないものを必ずあなたに与えてくれることでしょう。

備考・注意

熊本港は、これまでに許可を得て探鳥会が行われたことがありますが、現在ほとんどの海岸は立ち入りができない区域となっていますので、観察に際してはご注意ください。全国的な水鳥モニタリング調査、絶滅危惧種等の調査は許可を得ておこなっています。今後とも県当局には、ご理解をお願いいたします。

引用文献

- くまもとの野鳥 写真図鑑. 2009. 日本野鳥の会熊本県支部. p.38-39.
- 「ナベツル・マナヅル分散プロジェクト」啓発ポスター. 環境省・農林水産省・文化庁. 2003.
- WWF ジャパンホームページ. 有明海の主要な干潟 (図).

参考文献

- 東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリネットワーク* ホームページ. 2010.
(*注釈: 2008年、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップとなりました)
- IBA (Important Bird Areas) 重要野鳥生息地プログラム ホームページ. 2010.
- (財)日本野鳥の会ホームページ ナベツル・マナヅル分散プロジェクトの紹介. 2010.
- 湿地システムとしての水田における生物多様性の向上(水田決議). 農林水産省ホームページ(仮訳). 2008.
- 福岡県の希少野生生物. 福岡県. 2001.
- 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター ホームページ (中央農研 HP 鳥獣害研究室). 2010.

協力・謝辞 (敬称略)

ナベツル・マナヅル分散プロジェクトポスターの借用: (財) 日本野鳥の会, 重原美智子
有明海地図の借用: WWF ジャパン
写真・資料提供: 高野茂樹, 前田潤一, 満田實, 安尾征三郎。

特記しないものは studio 散歩道。

支部編集部、執行部の方々に、校正、内容等への助言をいただきました。

特に各中核地を調査される以下の方々(代表者のみ表示)の情報を盛り込んでいます。

(八代海:高野茂樹、白川河口周辺:白石健一・松本芳文、荒尾海岸:安尾征三郎)

〈自然観察の手引き〉 有明海・八代海沿岸の鳥

2010年5月10日 発行

制作・著作 日本野鳥の会熊本県支部

studio 散歩道

有明海・八代海沿岸の鳥 もくじ

<表紙>

- おもな湿地の位置図 1 ページ

<代表的な地域をみてみます>

- 球磨川河口 2 ページ
- 荒尾海岸 3 ページ

<重要な環境「水田」の季節別の機能をみてみます>

- 春～初夏の水田とヨシ原 4 ページ
- 冬の水田・ヨシ原と干拓地 5 ページ
(横島干拓に代表される「原野」的な環境の機能を考えます)

<野鳥にとって欠かせない休息地について考えます>

- 鳥はどこで休むのか? 6 ページ
-

<これらを踏まえた課題を整理します>

- 有明海を取り巻く課題 8 ページ
(事故、干潟への環境負荷、人との距離、
そしてマナツル、クロツラヘラサギなど
大型水鳥の保全について考えます)
-

<資料>

- 有明海の物質連鎖イメージ 12 ページ
- おわりに、参考文献など 13 ページ